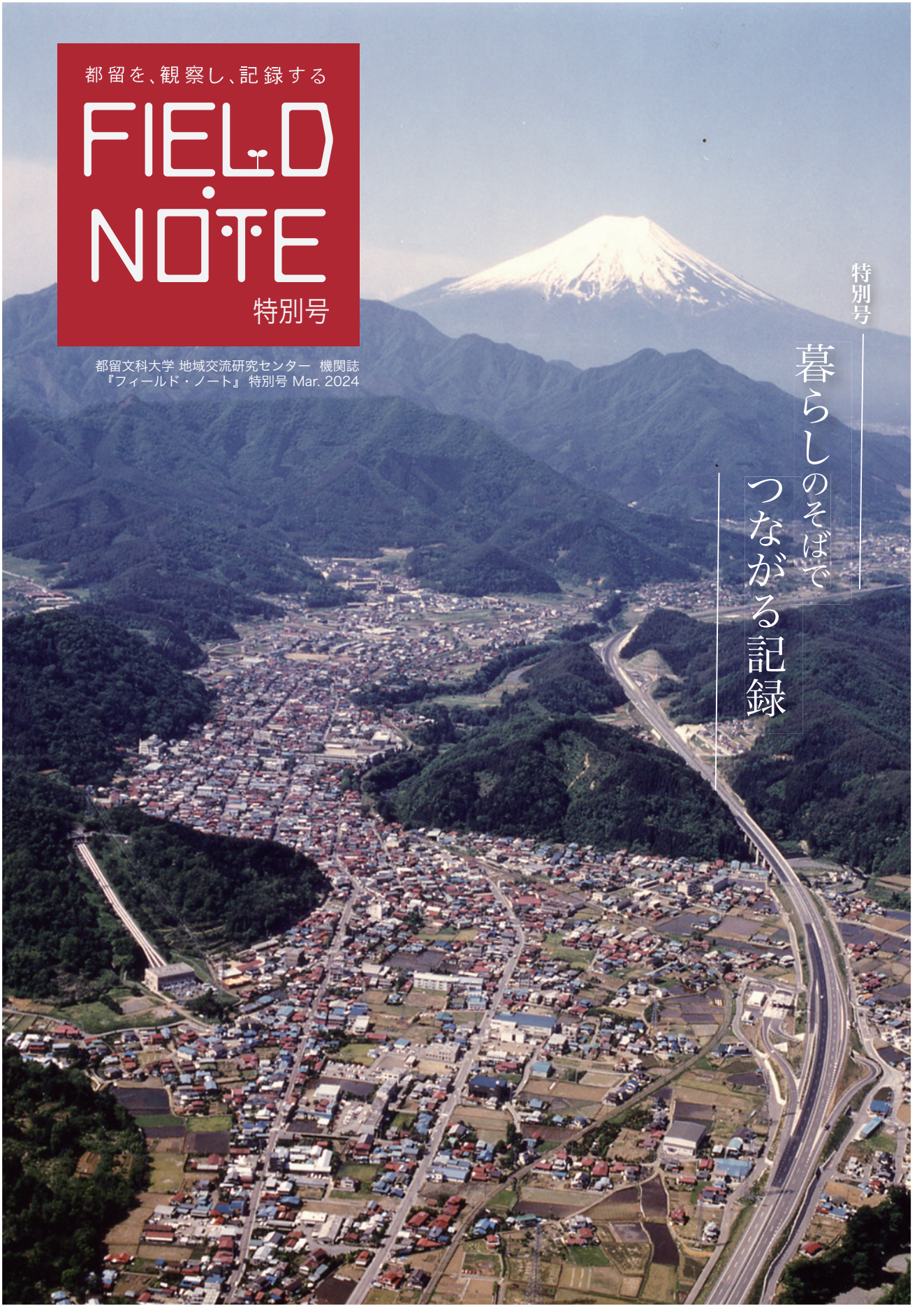
都留を、観察し、記録する

FIELD NOTE

特別号

都留文科大学 地域交流研究センター 機関誌
『フィールド・ノート』 特別号 Mar. 2024



特別号

暮らしのそばでつながる記録

特別号

暮らしのそばで つながる記録

富士吉田市から 十日市場駅周辺

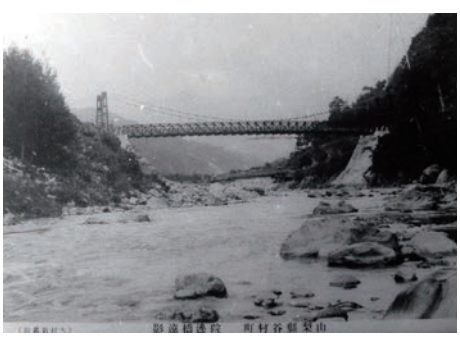
7 金鳥居と軌道
8 鹿留宮下橋の渡り初め
9 深田発電所
10 鹿留発電所
11 東桂駅
12 十日市場駅
13 田原の滝

都留文科大学

15 新築文大図書館
16 建設中の文大校舎
17 文大全景
18 競馬場でスキー
19 浄水場全景
20 草競馬
21 楽山から市街地を望む

都留文科大学前駅周辺

23 寒い朝
24 都留文科大学前駅
25 古写真に残る鉄道の記録



26 鍛冶屋坂付近
27 金山神社祭典
28 洗心橋
29 田んぼスケート

谷村町駅周辺

31 柳田橋より城山を望む
32 谷村町駅
33 大手の四季
34 西涼寺裏の山から谷村町を望む
35 三の丸発電所
36 仲良し

37 大手通り
38 関東大震災 剥げ落ちた土蔵の壁
39 都留市大神社公園

田野倉駅周辺

41 落合橋
42 朝日（石船神社前）
43 与縄橋
44 尾県小学校旧状
45 川茂橋
46 川茂全景
47 富士馬車鉄道大月駅

特別号

暮らしのそばで つながる記録

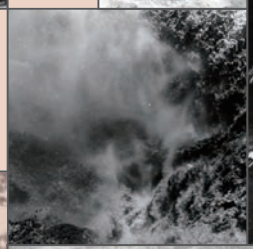
『フィールド・ノート』を発行している本学の地域交流研究センターでは
奥隆行氏や益子亮氏が撮影・蒐集・複写した写真を
オープンアーカイブとしてまとめています。

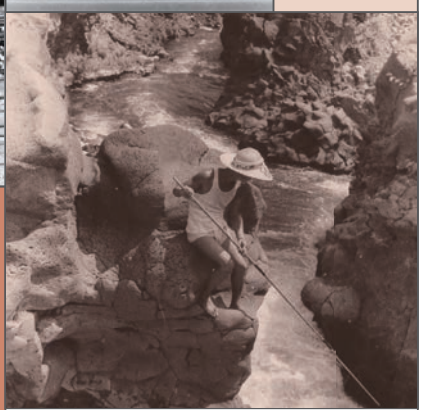
明治から平成の写真が保存されており、
当時の生活や、まち並みがわかる大切な記録です。

特別号では
『奥隆行写真コレクション』と『益子亮コレクション』から
都留市周辺の風景を選び、現在のようすと比較し記録します。

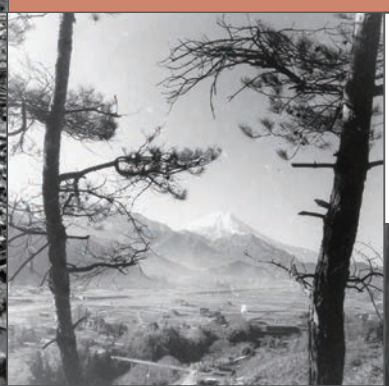
古写真と同じ場所を探すのは簡単ではなく、
撮影場所がわからないものもありました。
しかし、山やお寺など変わらない目印を頼りに
かつての面影を探します。

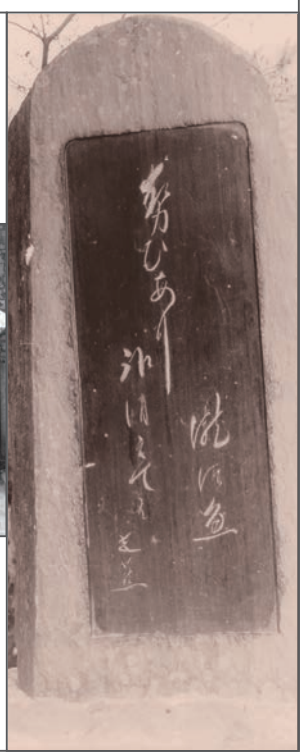
昔の都留と今の都留、
私たちの言葉とともに変化をお楽しみください。



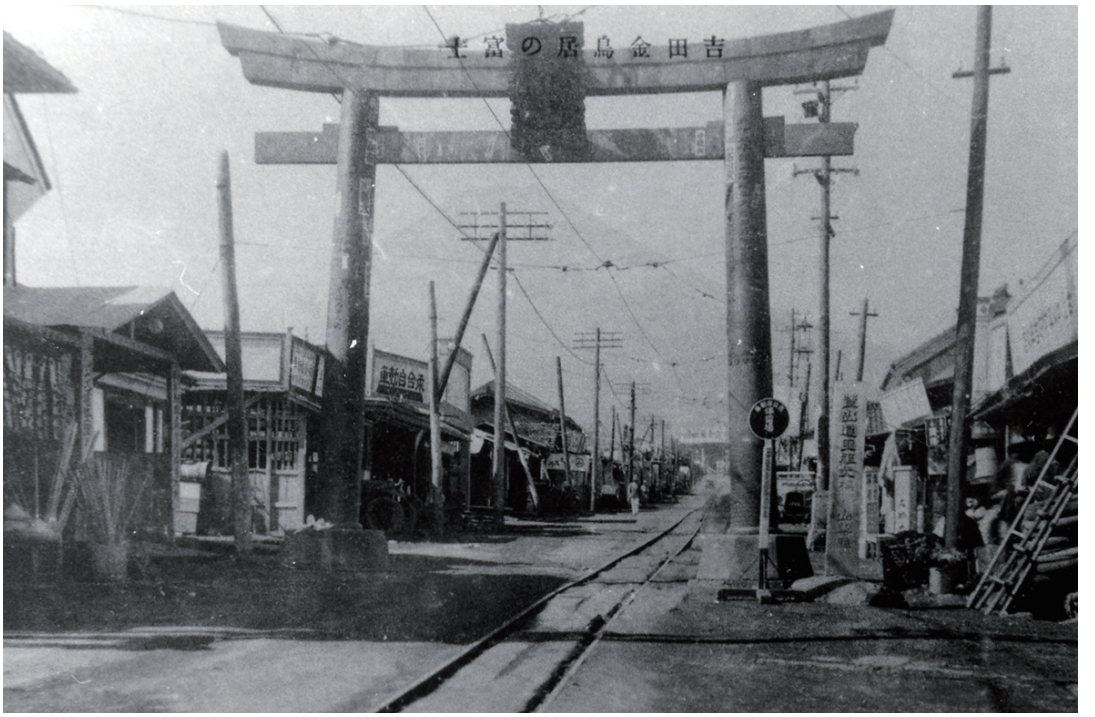


富士吉田市
から
十日市場駅周辺





01



富士山駅付近

金鳥居（かなどりい）と軌道

1788 年に建てられた金鳥居は富士山の信仰世界への入り口だ。外の俗界と富士山の山頂を中心とする霊界から切り離す境界でもある。古写真の金鳥居は 1878 年に再建し、戦時中の 1942 年に取り壊されるまで立ち続け、鳥居を貫く線路には馬車鉄道が走っていた。現在の金鳥居は 1957 年に完成した。多くの登山客がこの門を通り、富士山へと向かう。金鳥居は今でも、信仰の山「富士山」を見守っているようだ。

上：戦前　下：2023.9.10

宮下橋

鹿留宮下橋（ししどめみやしたばし）の渡り初め

一級河川の相模川（さがみがわ）（桂川（かつらがわ））に架かる鹿留宮下橋の渡り初めのようすである。このころの日本は、関東大震災や世界恐慌などの影響によって、貧困に喘ぎ疲弊している状況であった。都留の人びとも例外ではなかっただろう。人びとは、平穏な日常を望んでいたと想像できる。現在の静かな橋からは想像することができないが、昔を知ると、宮下橋からは、大勢の人びとの力強く生きようとする足音が聞こえるようだ。

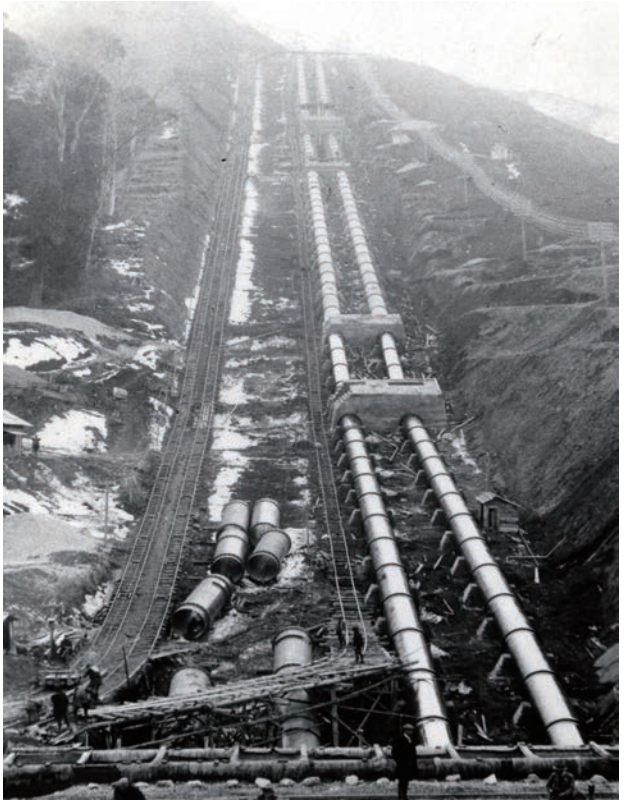
上：1932（昭和７）　下：2024.1.14

鹿留付近

深田（ふかだ）発電所

1920 年に運転を開始した水力発電所である。都留市鹿留で桂川の水を取り入れ、本学のうら山に設けた水路を経た水を発電に用いている。1920 年には山にほとんど木々は見られないが、100 年後の現在、木々が生長し森となっている。発電所裏の稜線は、現在、「都留アルプス」として遊歩道が整備されている。この発電所の近くには、発電所の安全を祈願して 1920 年 11 月に建立された桂川神社がある。

上：戦前　下：2024.2.12



鹿留（ししどめ）発電所

都留市は富士五湖を水源とする恵まれた水量の桂川によって、水力発電をおこなってきた。人の手が作り上げた発電所の構造物には凄まじい迫力がある。これを作るためにどれだけ多くの人々が汗を流したのだろうか。ここで作られた電力は東京などの地域に供給された。戦前の写真は、勅令「金属回収令」を受けた解体のようすである。水圧鉄管は、人の大きさから推測すると直径1メートル50センチはあるだろう。

上：戦前　下：2024.1.15

東桂駅（ひがしかつら）

郡内の鉄道は馬車鉄道が開通したのち、1927 年に富士山麓電気鉄道（現富士急行）へ変化した。東桂駅の愛らしい外観は長年変わっておらず、外に設置されている電話ボックスも昔のままだ。駐車場に描かれていた白線は、面影のみを残し、木々の生長から時代の流れを感じる。今では IC カード専用の改札機や都留を歩くための案内看板もある。東桂駅は少しずつすがたを変えていきながらも、人びとの暮らしに根付き続けている。

上：1979（昭和 54）　下：2023.9.24

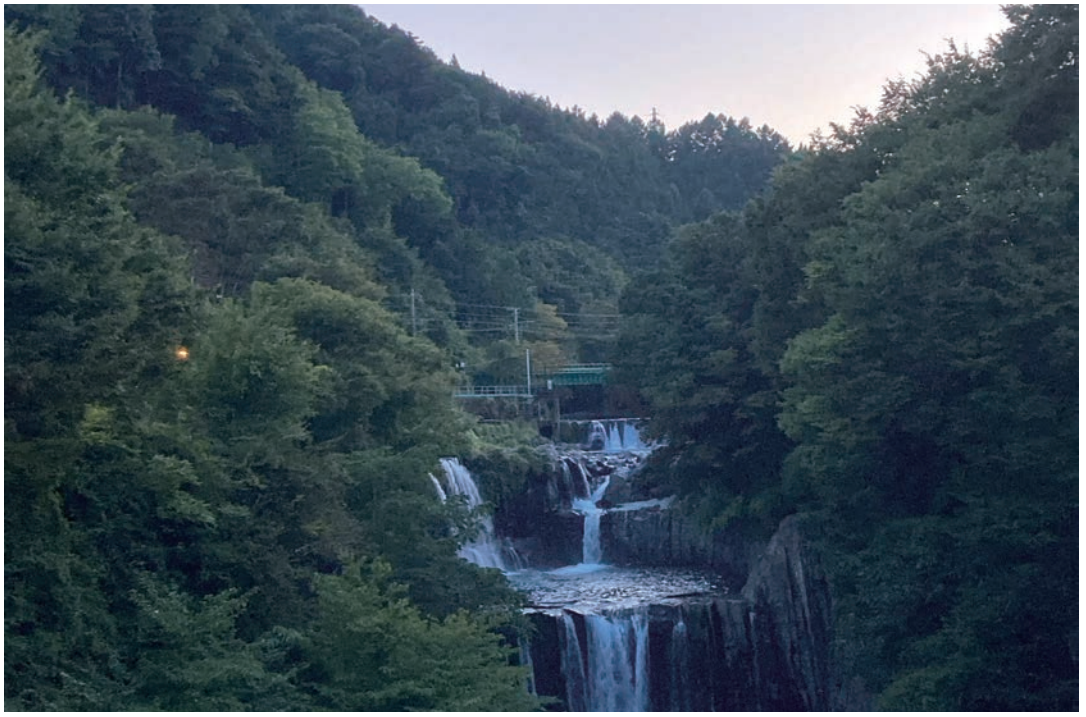
十日市場駅（とおかいちば）

住宅街のあいだにある坂道を登っていくと、ひっそりとたたずむ十日市場駅の入り口が見える。駅の向かい側にある稜線や電話ボックスは、1979 年当時から今も変化していない。入り口にある屋根は材質や塗装が変化していたが、当時の屋根の面影を感じさせてくれる。改札を抜けると待合室があり、十日市場駅を利用する人びとの休息所となっている。

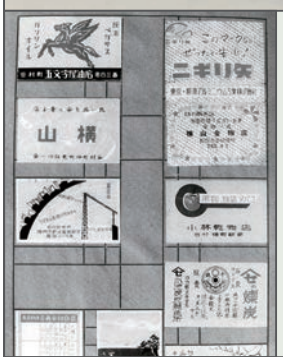
上：1979（昭和 54）　下：2024.3.5

田原の滝

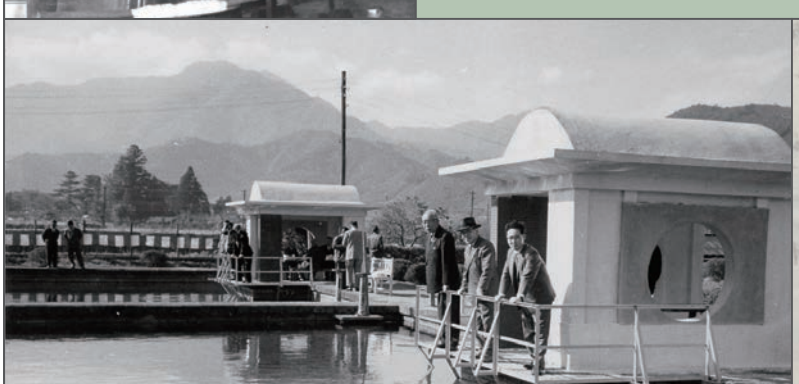
国道 139 号のわきをそれると田原の滝があらわれる。富士山から流れ出した溶岩が作り出す地形により、清流桂川が複数の滝となって流れ落ちる。かつて谷村の地に滞在した松尾芭蕉が「勢ひあり　氷消えては　瀧津魚（たきつうお）」と読んだ景勝地だ。明治時代の滝口の崩落や、それに伴う堰堤（えんてい）工事の結果、昔のすがたは失われてしまったが、大きな音を立てながら流れ落ちるさまに、今も石碑として滝を見つめる芭蕉は感嘆しているに違いない。



上：1886(明治 19)　下：2023.9.25



都留文科大学



02

新築
文大図書館

本学のテニスコートへと伸びる道、通称オレンジロードからは、都留文科大学付属図書館がよく見えたようだ。図書館は大学創立 50 周年記念事業として建てられたもので、2004 年に今のような運用が始まった。上の写真は 2003 年に撮影したもので、完成にむけて工事が続けられているようすがわかる。現在は図書館の前に 5 号館が建てられたため、全体を見ることは叶わない。しかし、20 年近く変わらず学生や市民の学習を支えてくれている。

上：2003(平成 15)　下：2024.2.29

建設中の文大校舎

現在はイチョウの木が大きくそびえ校舎を隠しているが、現在も本学の一号館として使用されている。今では本学でもっとも古い建物となったが、学生の学びを支え続けている。外観は当時と変わらないが、エアコンが設置されたり、コンビニが併設されたりと学生が使いやすい学び舎へとなってきた。田んぼやあぜ道が本部棟や赤の広場、コンクリートの道に変わっても、多くの学生がここを通り、学び舎へと向かっていく。

上：不明（文大校舎が現校舎に移転したのは昭和 44 年 8 月のことである）　下：2023.9.27

文大全景

本学に向かう坂道を登ると、左手に白い建物がある。自然科学棟だ。てっぺんには天体望遠鏡があるが、真下からは見えないのが惜しい。自然科学棟の外階段を登ると、古写真の面影を残す本学を見渡すことができた。よく見ると手前の建物には、もともとの写真ではなかった三角屋根がついている。現在のコミュニケーションホールである。1号館を中心に、本学は少しずつ大きくなっているようだ。

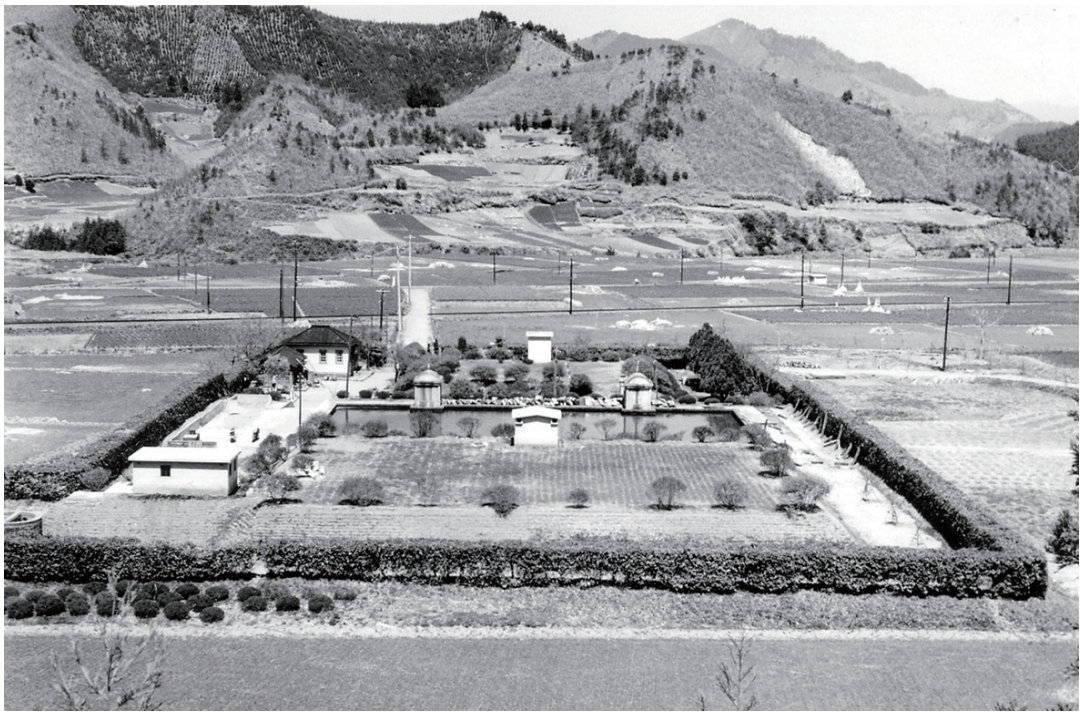
上：1984（昭和59）　下：2024.1.27

本学 4 号館前付近

競馬場でスキー

1933 年まで本学のあった場所は競馬場だった。本学付近は、山から流れ出る土砂などが堆積してできた扇状地である。昔は現在のような堅牢な砂防ダムによる防災対策がされていなかったため、この土地の特殊な性質で生活することは難しかった。しかし、人びとは荒れた土地を活かして一時の娯楽に利用したのである。春や秋には競馬、冬にはスキー場として、この地に住む人は楽しみを生み出していた。

上：戦前　下：2024.1.25

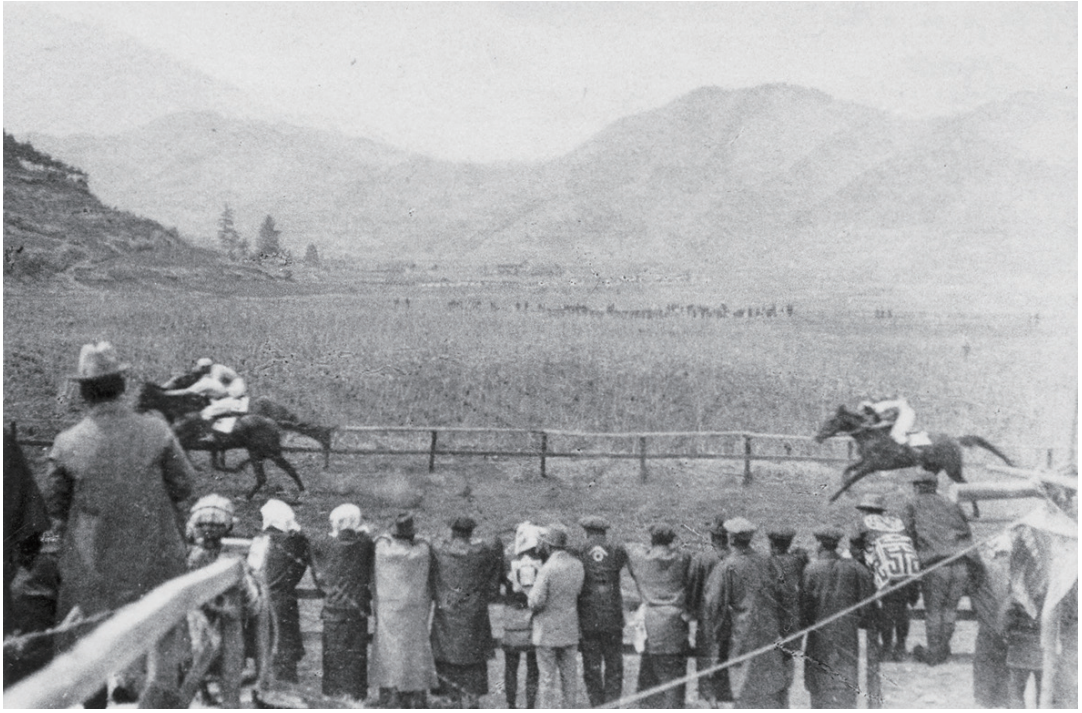


滝下（たきした）浄水場

浄水場全景

古写真では浄水場を囲むように田んぼが広がっている。写真を撮ったこの位置からはまちを囲む山の連なりがよく見えた。奥行きのある景色だ。現在、浄水場は無くなって住宅や整備された道路がある。昔は途切れることなく見えていた富士急行線の線路は、建物に隠れるようになった。しかし、稜線は大きく変わってはいない。浄水場があったこの場所は、変わっていくまちの景色と変わらない自然の景色が見られる場所だった。

上：不明　下：2024.2.8



本学駐車場

草競馬

1924 年、現在本学がある場所に競馬場が建設された。北清事変や日露戦争をきっかけに、軍部が馬匹 (※) 改良を進めようと全国に競馬を普及させたことに関係している。年 2 回行われる競馬は、都留市民の貴重な娯楽として楽しまれたそうだ。今、この場所は本学の駐車場となり、観客席は毎日のように学生が行き交う通学路へと変わった。目的は違っても人が集う場所に変わりないことに、胸がじんと熱くなる。

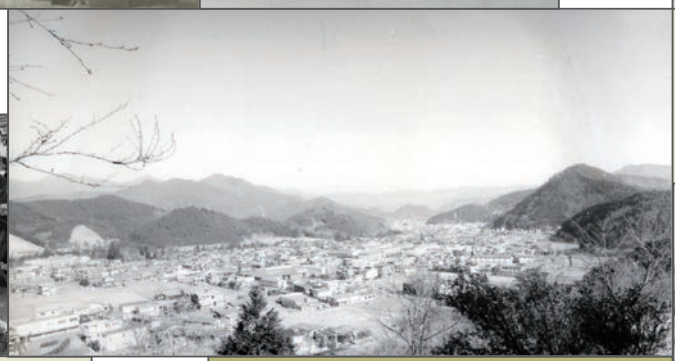
※馬匹…馬のこと。当時は戦争に馬を使っていた。参考：FIELD・NOTE　57 号

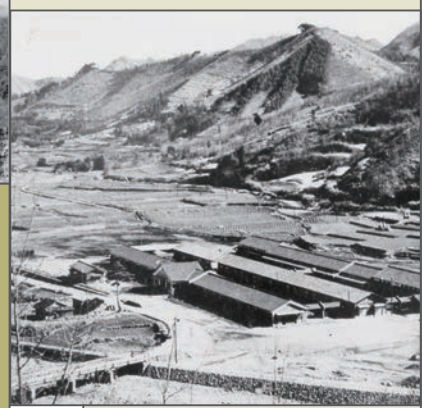
上：戦前　下：2023.1.27

楽山（らくやま）から市街地を望む

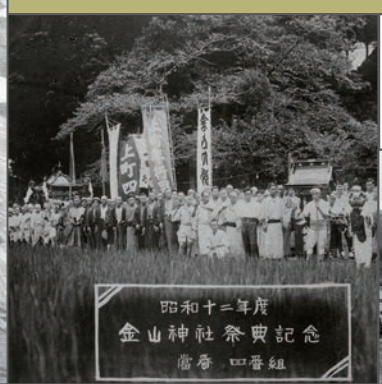
本学の裏にある楽山公園を登ると都留市街地を一望できる。当時は現在よりも学生数が少なく、下宿が多かったためアパートは今よりも少なかった。現在のような大型スーパーやドラッグストアはなく、学生の生活を支えていたのは谷村町を中心に点在した個人商店であった。都留市は学生のまちとも言われる。本学が少しずつ変わるごとに、都留のまちも変わってきたのかもしれない。

上：昭和 30 年代初期　下：2024.2.12

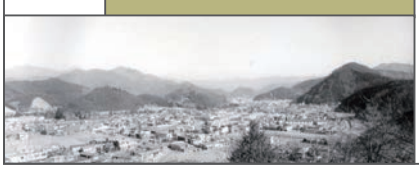




都留文科大学前駅周辺



03



都留文科大学前駅周辺

寒い朝

都留文科大学前駅に面した道から、富士急行線の線路のほうを向くと見える景色だ。並んだ建物に隠されて、線路の向こうがわまでは見通せなくなった。かつて田畑が広がっていたこの田原地区に、現在は多くの学生アパートが建つ。2004年に開業した都留文科大学前駅を中心にスーパーマーケットやドラックストアなどが建ち、都留の市民が頻繁に利用している。寒さに背中を丸めて歩く人びとのすがたは、今も昔も変わらない。

上：昭和30年代初期　下：2024.1.26

都留文科大学前駅

本学の多くの学生が、帰省やアルバイトなどで利用する駅である。ほとんどの学生は学校や自宅から徒歩何分で駅に着くかを把握しているが、見誤って電車に乗り遅れることもしばしば。大月駅から電車に乗るとちょうど眠たくなる時間で本駅に着くため、寝過ごさないよう細心の注意が必要だ。富士急行沿線は、春になると車窓から桜や菜の花など、お花見ができる。四季折々の楽しみがある電車だ。

上：2004（平成 16）　下：2024.2.14

古写真に残る鉄道の記録

特別乗車券　戦前

1900 年に開業した都留馬車鉄道の切符だ。都留馬車鉄道は現在の下吉田付近から山梨県と静岡県の県境付近にある籠坂峠まで運行したのち、西桂村まで路線を延長している。どちらも現在の都留市の範囲とは少しことなっている。

富士馬車鐵道發着時間表

（大正二年四月一日改正）

小沼發	谷村發	大月着	瀧車時刻	大月發	谷村發	小沼着
前						
午						
六、〇五	七、四四	八、五五	九、〇四	九、四八	一〇、三九	一一、一九
七、一〇	八、〇一	九、一〇	一〇、三〇	一一、一〇	一一、四五	一二、三〇
八、一〇	九、一〇	一〇、一〇	一一、三〇	一二、一〇	一二、四五	一、三〇
午						
一、一〇	一、四五	二、五五	三、一〇	三、四五	四、一六	五、三〇
二、一〇	二、四五	三、五五	四、一〇	五、一〇	六、一六	七、三〇
三、一〇	三、四五	四、五五	五、一〇	六、一〇	七、一六	八、三〇
四、一〇	四、四五	五、五五	六、一〇	七、一〇	八、一六	九、三〇
五、一〇	五、四五	六、五五	七、一〇	八、一〇	九、一六	一〇、三〇
六、一〇	七、四四	八、五五	九、一〇	一〇、一〇	一一、一六	一二、三〇
七、一〇	八、四四	九、五五	一〇、三〇	一一、一〇	一二、一六	一、三〇
八、一〇	九、四四	一〇、五五	一一、三〇	一二、一〇	一、一六	二、三〇
後						
午						
九、一〇	一〇、四四	一一、五五	一二、三〇	一、一〇	一、四五	二、三〇
一〇、一〇	一一、四四	一二、五五	一、三〇	二、一〇	二、四五	三、三〇
一一、一〇	一二、四四	一、五五	二、三〇	三、一〇	三、四五	四、三〇
一二、一〇	一、四四	二、五五	三、三〇	四、一〇	四、四五	五、三〇
一、一〇	二、四四	三、五五	四、三〇	五、一〇	五、四五	六、三〇
二、一〇	三、四四	四、五五	五、三〇	六、一〇	六、四五	七、三〇
三、一〇	四、四四	五、五五	六、三〇	七、一〇	七、四五	八、三〇
四、一〇	五、四四	六、五五	七、三〇	八、一〇	八、四五	九、三〇
五、一〇	六、四四	七、五五	八、三〇	九、一〇	九、四五	一〇、三〇
六、一〇	七、四四	八、五五	九、三〇	一〇、一〇	一一、四五	一二、三〇
七、一〇	八、四四	九、五五	一〇、三〇	一一、一〇	一二、四五	一、三〇

一　客車貸切ハ谷村大月間片道貳圓八拾錢、谷村小沼間片道貳圓八拾貳錢乘客定員ヶ八人トシ其以上ハ六人迄普通乘車賃ヲ申受ク、手荷物ハ第五項ノ規定ニ依ルヿ稍ハ三割增

二　中學校、工業學校、同試驗場通學生ハ一ケ月特別割引ナナス

三　前記學校以外ノ生徒ハ求メニ依リ十四人毎ニ普通乘車賃ノ二割引（黒ハ錢）

四　小兒四歲マデ無賃十歲マデ半額（黒ハ錢）

五　乘客手荷物ハ各自ノ機下及網棚ニ入レ得ベキ物（金石其他常量ノ物ハ除ク）ハ無料其以上ハ重量十貫目又ハ容積二尺立方迄ノ物一人一個ニ限リ申受ク

六　單獨ニ限リ一人一個十五貫目迄一人分ノ賃金ニテ載スト雖駄者藏ニ載ノ時ハ荷絡ス

七　大人乘客ニ幼兒ナキ限リ駄者藏ニモ一人分ノ賃金ヲ申受ク

八　死體運搬ノ貸切ハ大月谷村間片道金五圓七拾貳錢、谷村小沼間片道金參圓參拾六錢但シ夜間ハ三割增

山麓電車発着時刻表

1929（昭和 4）

1903 年に現在の大月から三つ峠付近までで開業した、富士馬車鉄道の時刻表だ。これをみると、現在では電車で 20 分ほどの大月から谷村間を 1 時間半ほどかけて走っている。それでも、人びとは電車ができたことを喜んだのだろう。

軌道会社機関車　戦前

軌道上を馬が引く、いわゆる「テト馬車」の写真である。富士馬車鉄道、都留馬車鉄道、御殿場馬車鉄道の 3 社によって、1903 年に大月から御殿場までがテト馬車でつながった。ただし、軌道の間隔がことなっていたため、それぞれで乗り換えていたようだ。

上谷（かみや）6 丁目付近

鍛冶屋坂（かじや）付近

国道 139 号から西願寺（さいがんじ）の横の鍛冶屋坂をのぼる。ふりかえり、右側に見えるいちばん大きな峰は三つ峠だ。数日前に降った雪がわずかに残っている。三つ峠から目線を下ろすと目の前に広がるのは道路と住宅地だ。トンネルを通る車の音や人びとの生活の音が聞こえてくるが、坂を少しのぼるだけでいつもと見える景色が変わる。あたり一帯に田んぼが広がっていたころはどんな音がしていたのだろう。

上：不明　下：2024.1.25

金山神社

金山（かなやま）神社祭典

人が集まる金山神社の祭りのようすである。金山神社は、山の恵み、稲の収穫の願い、農耕道具の素材や素材加工の技術への感謝などの思いが込められた六つの祭神を祀る。当時を生きた人びとは、先祖から受け継いできた伝承を、生きるための大切な情報として守っていた。自然や神など、人知を超えた偉大な存在を認めること、それを畏れながら微力な人間が力を合わせ、さらに大きな力となって支えあうことを伝えてきた場所だ。

上：戦前　下：2024.1.25

都留興譲館高校付近

洗心橋

洗心橋は富士みちに面している。国道139号から少し入ると1969年竣工のコンクリート製の橋がある。かつては木製の橋が架けられ、同じように学校があったようだ。現在は、山梨県立都留興譲館高等学校が建っている。洗心橋は昔よりも川幅が広くなり、橋も長くなっていた。長い間、子どもたちが渡っていた学校へ続く橋は、今もなお、かたちを変えて学びの場へと導いている。

上：戦前　下：2024.1.23

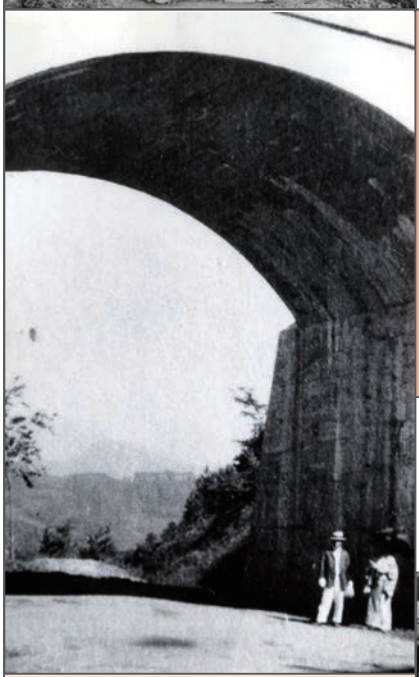
上谷６丁目付近

田んぼ
スケート

戦前は、田んぼに水をはり天然のスケートリンクを作って遊んでいたという。現在、たくさんの車が行き交う道路になっていることからは想像できない。あたりを見わたすと、道路をはさんで小さな公園を見つけた。大きさはスケートリンクよりも小さいけれど、ここに住む人たちのつながりを感じてあたたかい気持ちになる。今ではこの公園が人の集う場所になっているのだろう。

上：戦前　下：2024.1.25

谷村町駅周辺



04

柳田橋

柳田橋より 城山を望む

柳田橋は現在、橋としての形はなく地名としてのみ残っている。いっぽう古写真では川幅が広く、その上に架かる橋があったと予測できる。当時の背の高い草原には家が建ち、白い服を着た人が歩く細い一本道は車が通れる広さになり、城山は隠れてしまった。ただ古写真のタイトルは「城山を望む」である。当時の人びとは、橋からはっきりとみえる城山をみながら、道ゆく人と話し、季節の移り変わりに気がついた場所だったのかもしれない。

上：戦前　下：2024.2.3

谷村町駅（谷村城下町駅）

谷村町駅（やむらまち）

当時は、若い男子が早く軍人になって国家のために命をかけて戦争に出ることを奨励する運動が盛んだった。この写真の人びとも 20 歳以下の少年たちである。若い女子もまた国家のために動員された。写真は第二次世界大戦敗戦の２年前、志願兵となった写真中央の人物を大勢の同級生の男性が谷村町駅から見送っている。写真では、目つきまではわからないが、顔の陰影から引き締まった緊迫した空気を感じる。

上：1943(昭和 18)　下：2024.1.25

大手通り

大手（おおて）の四季

都留市立図書館と谷村第一小学校のあいだをつないでいる道には、かつて街路樹が立っていた。枝々の先に雪の華を咲かせるようすは、とてもきれいだっただろう。現在は街路樹にかわってポールが並んでいる。古写真を見ると、左側に煙突があるのがわかる。これは酒造店のもので、米を蒸すさいに使われていたという。煙突は昭和10年ころに取り壊され、現在その跡地にはコンビニが建っており、時間の経過を感じることができる。

上：戦前　下：2024.3.1

西涼寺

西涼寺（さいりょうじ）裏の山から谷村町を望む

立ち並ぶ墓石のあいだを縫って斜面を登り、振りかえる都留市のまち並みが広がっていた。見下ろした先に、西涼寺・専念（せんねん）寺・東漸（とうぜん）寺の３つの寺が並び、緑豊かな山々に囲まれた谷村町が一望できる。晴れの日には、正面に見える尾崎山・倉見山越しに富士山がのぞく。遠方には、私たちの学び舎である本学が見えた。豊かな自然と祖先に見守られ、谷村の人びとと学生の暮らしが続いている。

本文出典：都留市観光協会ホームページ、都留文科大学ホームページ　　上：1984（昭和 59）　下：2024.2.3

元気くん２号付近

三の丸（さんのまる）発電所

富士急行線谷村駅から家中（かちゅう）川沿いに 10 分ほど歩いた場所に家中川小水力市民発電所がある。ここには 1954 年まで谷村町や十日市場に電力を供給した三の丸発電所があった。この発電所の取水口あたりは子どもたちの絶好のプールだったという。この場所を訪ねてみると、川幅は３メートルほどしかない。しかしよく見ると道の側面からも水が流れ出ており、川幅は今よりも広かったことがうかがえる。

上：戦前　下：2024.2.14

西涼寺付近

仲良し

西涼寺は戦国時代、鳥居氏が谷村を治めていたころに開かれた。二度火事を経験し、現在の建物は 1972 年に再建したものだ。写真は、西涼寺正面から富士みちに向かって撮影した。古写真では富士みちまでの道の長さが短く、正面の門も現在はない。いっぽうで、2 人の子どもが立つ石垣とその芝生は変わっていない。2 人が立つ場所にいくと、都留アルプスからの風を感じることができた。

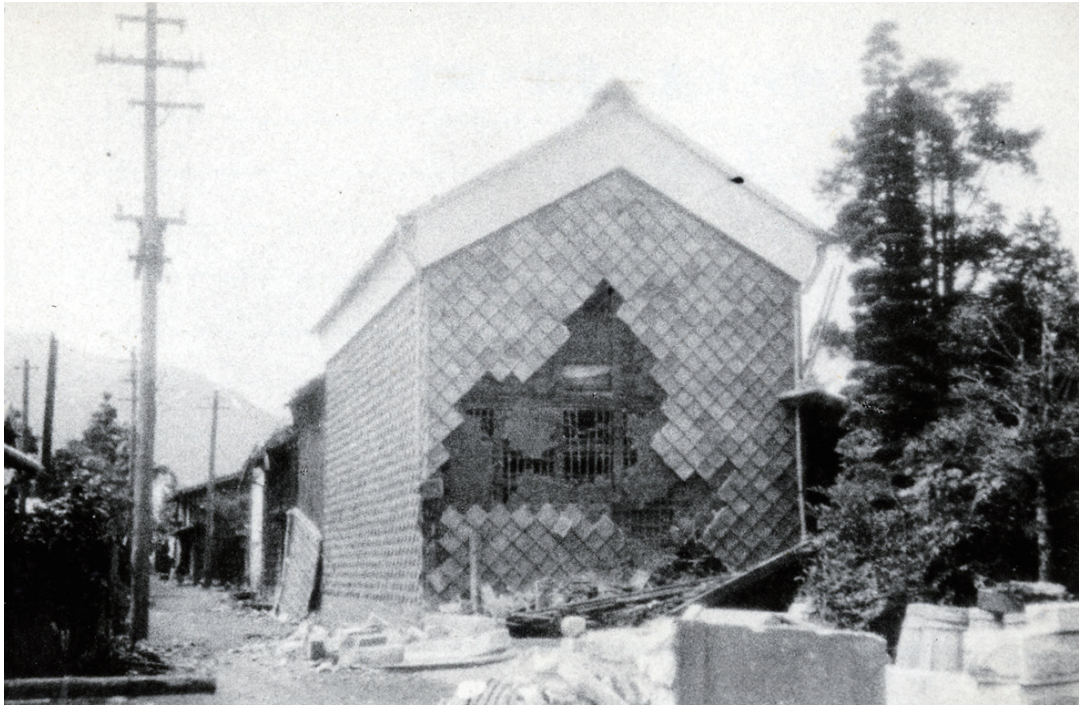
上：1947(昭和 22)　下：2023.9.24

都留市役所付近

大手通り

都留市まちづくり交流センターから、富士みちと直角に交わる道路をまっすぐ進む。左側の「谷村信用組合」は、2004 年に「山梨県民信用組合」に変わった。右側は「よこやま呉服店」で、三越デパートをモデルに 1916 年に建てられ、ざらざらとした淡いクリーム色の壁が特徴だった。創業 130 年近く経った 5 年ほど前に店をたたみ、現在は更地になっている。当時店頭に並んでいた品物は、横山呉服店の後継者が大切に保管している。

上：1986（昭和 61）　下：2023.10.5



都留市まちづくり交流センター付近

関東大震災
剥げ落ちた土倉の壁

関東大震災から 101 年が経った。かつての都留市は、絹織物を中心として栄え活気のあるまち並みであった。しかし、震災によって景色が一変した。現在の私たちも、いつ起きてもおかしくはない首都直下地震や南海トラフ地震など、大規模災害のリスクに直面している。先人が残したこれらの記録は、今後、起こるかもしれない未知の困難から生き抜くための示唆や教訓を与えてくれる。

上：1923（大正 12）　下：2024.1.25

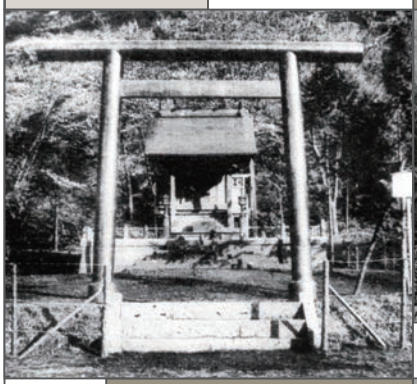
都留市まちづくり交流センター付近

都留市大神社公園

仲町大神社（なかまちだいじんじゃ）と護國神社（ごこくじんじゃ）の間にある公園。かつて、大きな噴水や根の立派な木があったが、今ではどちらも無くなって広いグラウンドになり、数台のベンチが置いてある。石の坂を登った先には、背の高い木に囲まれてブランコや滑り台などがたたずむ。今では新しくなったが、位置はほぼそのままだ。春夏は緑に、秋は紅葉に包まれてブランコを楽しめる。この写真に映る人びとも、同じように自然を感じながら公園で過ごしていたのだろうか。

上：戦前　下：2024.1.22

田野倉駅周辺から大月駅周辺



05

落合水路橋

落合橋（おちあいばし）

1907年に建てられた水道橋で、駒橋（こまはし）発電所へ毎秒約25立方メートルの水を送っている。今では珍しい煉瓦造りの大きな橋で1997年に国登録有形文化財に登録された。現在橋の近くには「café 織水」という小さなカフェがある。カフェの机に飾ってある建設中の橋の写真を眺めていると、「昔から絵描きさんが来て、橋をスケッチしていたらしいよ」とオーナーの若林さんが教えてくださった。思わず絵や写真に留めておきたくなる風景だ。

上：戦前　下：2023.6.24

石船神社（いしふね）

朝日（石船神社前）

写真に写る人の服は薄手のもので、右岸側手前の落葉広葉樹は葉が残っていることから、撮影時期は真冬から春先ではないだろう。現在、川には水が流れていない。台風や大雨などで定期的に氾濫することもないようで、河川敷にはススキが繁茂している。当時の写真の左側の石垣の裏にある大きな木は、ケヤキと思われる。このケヤキは現在も生えているが、やや右側（南側）に傾いているように見えた。

上：1907（明治 40）　下：2024.1.19

朝日川

与縄橋（よなわばし）

橋の向こうに見える山の斜面のようすは、撮影時と現在ではかなり違っている。当時は畑か草原のようだが、今は林になった。橋の上にいる７人の男性はスーツを着ていたり、力仕事をするような服装をしていたりする。右岸側には人家が増え、橋脚や欄干も作り直された。現在、この橋の下に水は流れていない。当時の写真を見ても、河川には石や砂が多く堆積しており、ここはつねに水が流れる川ではないようだ。

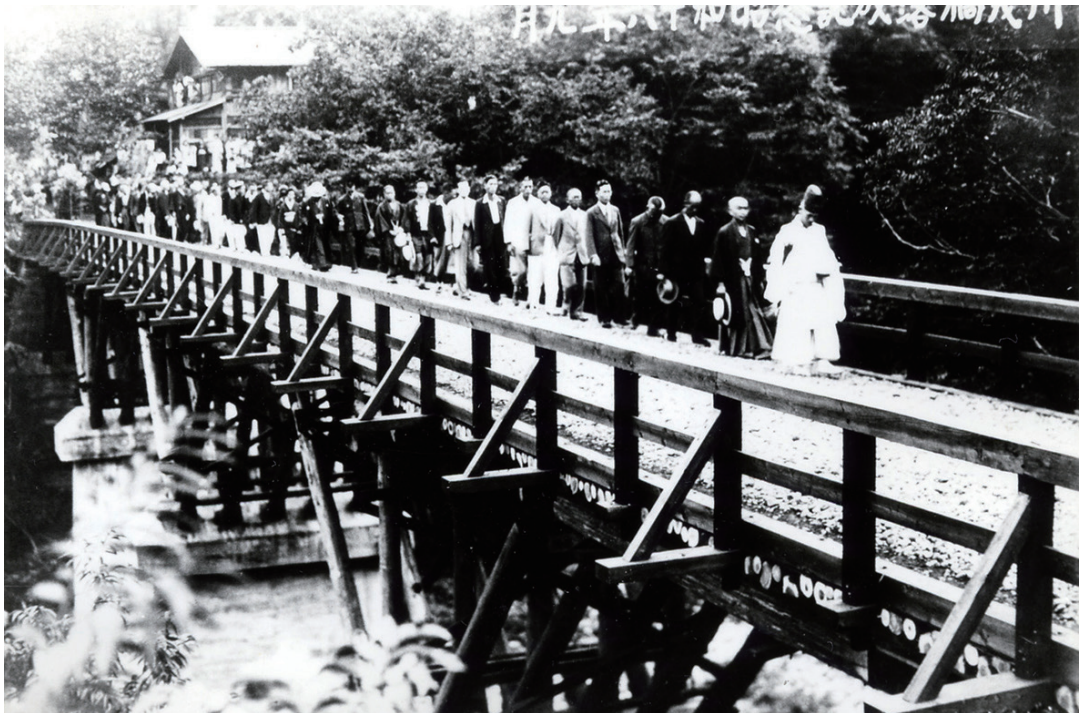
上：1907（明治 40）　下：2024.1.19

尾県郷土資料館

尾県小学校旧状（おがた）

昔と変わらない入り口前にあるマツの木は、伐られたのか小さい。1 階と 2 階にある窓や壁は障子のようなものから木材に変わり、色も塗り替えられ修繕が進んでいた。資料館の前には遊具やベンチがあり、訪れた人の休憩所になっている。1878 年開校、1941 年に閉校するまで、子どもたちの教育を支えた。現在は、尾形山郷土資料館として山梨県の指定文化財になっている。

上：戦前　下：2024.1.17



川茂橋（かわもばし）

富士急行線禾生（かせい）駅から徒歩５分ほどの場所に川茂橋がある。この橋は、桂川左岸の都留市川茂と右岸の都留市古川渡（ふるかわど）とを結ぶ。橋名は左岸の川茂の地区名から命名された。川の両岸は切り立った崖になっており、二つの地区をつなぐ橋がいかに待ち望まれたものだったかが当時の写真から見てとれる。写真には、「昭和 16 年 9 月」記されている。現在の橋の橋名板には、「かわもばし」、「平成 25 年 8 月竣工」と表記されている。

上：1941（昭和 16）　下：2024.2.12

浄泉寺付近

川茂全景

富士急行線禾生駅から 10 分ほど歩くと川茂発電所（1922 年に運転を開始）が見渡せる場所に着く。近くには浄泉寺があり、ここのお寺の裏を通る急な坂道は高川山の登山ルートの一つとなっている。この坂道からは富士山が見え、春には川茂発電所周辺の桜が川沿いを彩る。古写真にはモノクロのため桜が白く映し出されている。おそらく春に撮影されたものだろう。都留市が細い谷間に位置し、自然との距離が近いことも見て取れる。

上：不明　下：2024.2.12

大月駅

富士馬車鉄道 大月駅

舗装のない地面に鉄路を見つけることができる。馬車鉄道という名の通り鉄路の上に乗った客車を馬が引く乗り物で、人びとの生活を支える貴重な移動手段であった。運行区間は、現在の大月駅から三つ峠駅である。三つ峠駅は小沼駅と呼ばれ、後に三つ峠駅へと改名した。客車は、たびたび脱線したそうだが乗客も手伝って鉄路に乗せ直していたそうだ。当時の人の心の豊かさを感じるエピソードだ。

上：戦前　下：2024.1.25

特別号

暮らしのそばで つながる記録

私たちの生活が、すこしずつ進化していくように、
このまちも、ゆっくりとかたちを変えているようです。
錆びてしまった看板も、枯れてしまった川も
昔、人の営みのそばにあったものでした。
今、当たり前にすごしている日常も
いつかは誰かの記憶になるのでしょう。
しかし、それは悲しむことではありません。
写真は暮らしの一瞬を記録します。
そして、保管された記録は思い出となり、
何十年も積み重なっていきます。
２０２４年に編まれたこの記録が
50年後の誰かにつながっていきますように。

特別号

暮らしのそばでつながる記録

【出典】

『奥隆行写真コレクション』
発行日：2012 年 3 月
発行：都留文科大学地域交流研究センター
フィールド・ミュージアム部門

『谷の町・史の里　益子亮写真展
～思い出の記録・時代の記憶～』図録
発行日：2010 年 3 月 15 日
発行：都留文科大学地域交流研究センター
フィールド・ミュージアム部門 /
都留市立図書館

古写真や古写真にまつわる情報があれば、本学地域交流研究センターまでお寄せください。

都留を、観察し、記録する

FIELD NOTE

特別号

発行人
北垣憲仁〔9,35,45-47〕
統括編集者
西教生〔8,42,43〕
編集長
阿部くるみ〔1-52〕
髙橋杏佳〔1-52〕
佐藤優美〔1-52〕
編集
浅井祐音〔16〕
原優希〔12,44〕
原口桜子〔37,39〕
村井開〔7〕
渡邊結佳〔19,41〕
印南響〔23,34〕
北原日々希〔33,36〕
高橋美唯〔17,20〕
谷上碧〔21〕
根本菜桜〔11,28〕
久永奈央〔26,29〕
横山幸乃〔13〕
青木宏樹〔10,18,27,32,38,47〕
ロゴデザイン
工藤真純
〔　〕は編集担当ページ

FIELD·NOTE (フィールド・ノート) 特別号
発行日：2024 年 3 月 19 日
発行部数：1000 部
発行・編集：
〒402-8555
山梨県都留市田原 3-8-1
都留文科大学
地域交流研究センター
『フィールド・ノート』編集部
E-mail : fieldnote.2020@gmail.com

バックナンバーは都留文科大学地域交流研究センターにありますので気軽にいらしてください。

表紙写真

奥隆之写真コレクションより、都留市街地と富士山を収めた航空写真です。富士山の近さが感じられる一枚になっています。市内を歩いているときに富士山がひょっこり見えると、なんだか得した気持ちになります。
（撮影日：不明）

編集後記

私と都留の

けーきとお惣菜を買って集まろう。今日は一緒にご飯を食べよう。嬉しいことを共有したいとき、アイディアをもらいたいとき、小さなパーティーを開催します。編集部の同期の阿部と髙橋とも集まることが多く、深夜まで話し込むこともありました。全員が近くに住んでいるからできたのでしょう。本学の周りには多くの学生が一人暮らしをしています。さすがに「お醤油が切れたから貸して」という漫画のような場面に遭遇したことはありませんが、支え合いながら暮らしています。学生を気にかけてくださる市民のかたも多く、親しげに話しかけてくれます。人と人との距離が近い、あたたかな雰囲気の都留が大好きです。（佐藤優美）

しかたないよね、コロナだし。大学生活のスタートは画面に並ぶ同級生の名前を見ながらの授業でした。思い描いていた大学生活ではなかったかもしれないけど、「しかたない」で終わらせるつもりはなかった。大好きなコンサートや舞台もたくさん見た。旅行にだって行けたし、飲みすぎて二日酔いのままバイトに行くことだってあった。そしてなにより４年間、編集部で活動したことが、私の忘れられない思い出だ。ほかの文大生より、ちょっとだけ都留に詳しくなれたかな。決して上手ではなかったけれど、続けてきたことが私の誇りです。隣で一緒に頑張った佐藤と髙橋にとびきりの敬意と感謝をこめて。(阿部くるみ)

きになった場所へ、時にはきまぐれに、都留をたくさん歩いた４年間でした。おいしいご飯のお店、ちょこんと見える富士山、坂の上で都留を一望した風景は、編集部の同期と歩いて見つけたものです。はじめての場所へ行ったときはあかりがぽっと灯るようにその場所のことをわかった気がしていました。何度も行くようになった今では、あの時話したこと、笑い合ったことが浮かびあがってきます。なにげないまちの風景も不変ではないことを、この号を通して学びました。都留が変わりつづけても、はじめてのまちを自分の足で歩くことで、少しずつ自分の思い出が詰まったまちになった感覚は、ずっと覚えていると思います。(髙橋杏佳)

都留のお祭り

八朔祭（はっさくまつり）

このお祭りにも「山車」が出ると聞いて、地元のお祭りを思い出した。岩手県花巻（はなまき）市では「風流山車」と呼ばれていたが、都留では「八朔屋台」という。祭りを華やかにするこの屋台は、江戸時代に作製されたそうだ。葛飾北斎などの名だたる浮世絵師によって描かれた飾り幕が目玉だ。

八朔祭では、４つの屋台を見ることができる。「桜に駒」「鹿島踊」「虎」「牧童牛の背に笛を吹く」それぞれの作品が、明るく照らされて夜のまちを彩っている。法被を着て屋台を引く地域のかたや、家族や友人とお祭りを楽しむすがたは、とても生きいきしていた。

お祭りや八朔屋台が、何年ものあいだ大切にされてきたことが、古写真から見えてきた。

FIELD·NOTE 特別号

発行日 2024年3月19日
発行所 〒402-8555 山梨県都留市田原3-8-1 都留文科大学
地域交流研究センター『フィールド・ノート』編集部

FIELD·NOTE 2024年 特別号 暮らしのそばでつながる記録

都留文科大学 地域交流研究センター